

教員氏名：林 智草（児童教育専攻／准教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

教育学部児童教育専攻に所属しており、小学校教諭免許状、幼稚園教諭免許状、保育士資格の取得に必要な科目を主として担当している。令和6（2024）年度の担当科目は以下の通りである。

科目名	開講年次	科目区分
幼児と表現 A	2 年前期	幼稚園教諭必修および保育士選択必修
音楽	2 年前期	小学校教諭選択
保育内容（表現 A）の指導法	3 年前期	幼稚園教諭必修および保育士必修
初等教科教育法（音楽）	3 年前期	小学校教諭必修
授業観察演習	3 年後期	幼稚園教諭選択
保育実習 I（施設）	3 年後期	保育士必修
保育実習指導 I（施設）	3 年後期	保育士必修
保育実習 II（施設）	4 年前期	保育士必修
保育実習指導 II（施設）	4 年前期	保育士選択必修

また、これらに加え、学部全体の科目として基礎ゼミ I・II、総合ゼミ I・II、教育学研究法 I・II、教育学研究法、卒業研究を担当している。その他、高崎市立高崎経済大学附属高等学校において音楽科「器楽」を担当し、鍵盤楽器（ピアノ）の演奏指導を行っている。

2. 教育の理念（なぜやっているか）

私自身の専門は芸術学であり、その中でもピアノの演奏表現を専門領域としており、その延長として演奏指導を行っている。そのため、音楽教育、特に幼児を対象とした分野についてはもともと専門としていない。しかし、乳幼児期における音楽は単に音楽を聴いて楽しむことにとどまらず、音楽を通して五感を働かせ、様々な知覚を獲得していく大切な役割を担っている。また、小学校学習指導要領にも示されている通り、音楽科では生涯に渡り音楽に親しむ姿勢を築くことに重きを置いており、乳幼児期から学童期において音楽

と親しむことは非常に大きな意味を持っている。既に述べた通り、自身の専門は芸術学であり、西洋音楽を対象として研究を行ってきたが、音楽は特殊な教育や訓練を受けた者だけが享受するものとは考えておらず、広く多くの者に親しまれるべきものと思っている。

保育者・教員養成課程をもつ本学では、実際に乳幼児や児童に対して何かを指導するわけではなく、学生たちが音楽的な基礎的技術や知識を修得し、将来、子どもの前で音楽活動を展開できるような力を身につけることを目的としている。そして、そのような学生の育成を行うことが私自身の使命である。保育者、教員を目指す者が等しく一定の音楽的能力を持っているわけではない中で、一斉授業を通じて上述のような力を短期間で修得させることは決して容易ではない。

保育、教育現場では、子どもたちが音楽に触れることにより、自分自身を表現する喜びや、他者と共に音楽を楽しむ喜びを体験することが可能である。そのような活動を展開するためには、保育者や教師が音楽の楽しさを十分に理解していることが何よりも大切である。もちろん、高い演奏技術や音楽的な知識を持つことも大切であるが、それよりも音楽の楽しさ、面白さを感じていることの方がはるかに重要であり、そのような思いが子どもにも伝播すると考える。そのため、授業では難しい内容を扱うことは避け、保育、教育現場で必要な音楽的知識や技術を確実に修得させることを第一としながら、同時に、学生自らの感性を高められるような学習や実践を多く取り入れるように心がけている。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

『音楽』や『保育内容（表現A）の指導法』においては、対面授業での指導に加え、動画を活用した授業を展開している。例えば、『音楽』ではピアノ初心者向けに簡易楽譜を提示すると同時に、ピアノの鍵盤を俯瞰するアングルで撮影したお手本動画を Google Classroom を介して配信し、個人練習の一助として活用してもらっている。また、課題曲については簡単な伴奏譜（和音奏）からやや難しいもの（アルベルティ・バスなど）を満遍なく配置し、徐々にステップアップを図れるよう配置を工夫している。

特にピアノの学習経験がないままに教員養成校に入学した者にとって、両手でピアノを弾けるようになるには相当な努力が必要であり、その過程があまりにも苦しければ、「音楽（ピアノ）＝苦痛」と刻みこまれてしまうだろう。学修到達目標を最終目標としつつ、授業では着実に目標を達成できるよう、スモールステップを心がけ、毎時、学生一人ひとりの進捗を把握し、必要に応じて個別のフォローアップを行っている。また、学習の進捗状

況に応じて柔軟に指導方法を調整し、受講者全体の理解度が向上するよう努めている。こうしたアプローチにより、学生は自己効力感を高めながら、授業の目標を達成していくことが可能となる。

『保育実習指導（施設）』や『授業観察演習』は幼児教育コース3年次春休みから開始する実習に向けた準備のための授業であるが、これらの授業では説明の要点をまとめたプリントを毎時配布し、実習時も学生自身が授業の説明内容を振り返ることができるよう、順序立てて資料を作成することに心掛けている。また、課題を課した際には、可能な限りコメントを付してフィードバックするよう努めている。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

上記のような方法で授業を展開することにより、シラバスに掲げる学習到達目標を達成しやすくなっていると感じる。特に『音楽』（2年次科目・小免選択）では、この科目で初めてピアノに触れる学生が例年4割程度存在するが、半期15回の授業を通して簡単な楽譜であれば両手で演奏できるようにまで成長する。通常、ピアノの演奏技術習得にはそれ相応の時間を要するものだが、必要に迫られてピアノを弾かなければならないという環境に加え、上記のような教材やお手本動画の提示がピアノ演奏技術の習得に大いに役立っていると考えられる。

また、各学期末に実施している学生による授業評価アンケートではいずれの科目も概ね高い評価を得ており、授業方法については適切だと判断できる。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

学生のタイプは年々変化していると感じる。例えば、児童教育専攻幼児教育コースに入学した学生のうち、ピアノ初心者の占める割合は以前よりも1割程度高まっている。また、幼少期にピアノの学習経験があっても「上級者」と呼べる（判断できる）学生の層は薄くなっており、感覚的には6割程度が初心者、もしくはそれに準ずるレベルにある。そのため、学生が半期15回で着実に、かつ効果的にピアノ演奏技術を身に付けられるよう、学生の全体的なレベルに合わせて課題曲の選定や難易度を今一度見直したいと思う。しかし当然ながら、学生が実習や将来において困らないよう、最低限のレベルは死守しなければならない。その見極めはやはり授業での学生の反応をしっかりと受け止め、理解度を探ることにあると考える。その点を心に留め、授業に臨みたい。

また、新型コロナウイルス感染症が流行した 2020 年以降、遠隔授業が活発的に行われるようになった。現在は対面授業を基本としているが、遠隔授業のように学生が一人でも必要な勉強を行えるよう、そのような環境を整えることも大切だと考える。音楽のように個人指導を主軸とする授業では、対面授業 90 分をいかに効率的に活用しようと努力しても、時間が足りないと感じる場面は多い。そのため、ICT を活用した教材を今以上に充実させたり、授業時間外でのビデオ会議システムを活用した個人指導を行ったりするなど、対面授業「+α」の学修支援を拡充していきたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

- 1 担当科目のシラバス
- 2 授業で使用している配布資料のサンプル

(2024 年 8 月 29 現在)